

稱讃 一三七号

二〇二二年九月一日発行

かなしきかなやこのごろの
和国の道俗みなともに
仏教の威儀をもととして
天地の鬼神を尊敬す

『正像末和讃(悲歎述懐讃』

発行　浄土真宗本願寺派　稱讃寺

〒一二二ー〇〇七五
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
TEL　〇三ー五二四二ー二〇二五
FAX　〇三ー五二四二ー二〇二六
HP　shousanji.com

二〇二二年度　稱讃寺門信徒会費

年会費　六千円
振込先　城北信用金庫　一ツ家支店
名　義　浄土真宗本願寺派　稱讃寺教会
代表　北村　信也
口　座　普通　六一七六〇五一

葬送の儀礼は、「グリーフ(悲嘆)ケア」の一つと思いますが、お釈迦さまは、「自分の葬式は在家の人に任せて、出家者はそんなことに関わらず修行をしなさい。」と仰ったそうです。しかし、そのことが後に大衆の家庭内に仏教が浸透しなかった一因になってしまったとも言われます。江戸時代の寺請制度により、寺院が葬儀をすることが一般化したのだろうと思いますそれまでは、「鎮護国家」や貴族・上級武士等だけの仏式の葬儀だったと思います。末法の世を聞いたことがありません。

しかし現代の寺院では葬儀は欠かせません。臨終勤行-通夜-葬式-初七日-以後、七日ごと-四十九日法要-百か日法要-一周忌-三回忌と続きます。また月忌・祥月命日法要・お盆もあります

私が学生の頃「葬式仏教」と揶揄されており迎を期待しましたが、ある先生は「葬式仏教、大いに結構」とおっしゃり私はびっくりしたことがありました。一方民衆においては生死甚だ尽きがたしで止まっている)になりました。コロナ禍では、更に遺族民俗宗教である神汚れの考え方や中陰など、仏教ではないことを道を信仰していまさえ会えず、茶毘にふされる事もありました。僧侶を中心に世間がさも仏教として行って、仏元になされてきたことです。葬送の儀礼、仏事(法事)は寺院運営面でも欠かせないのが実情でありますが、仏教として人々にとって、その大切さをあらためて見つめたいと思います。

そして、お寺の存在意義・活動そのものが「ビハーラ」として人々に思えてもらえるような、そういうお寺になれるには、どうしたら良いでしょうか。これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。





○この部分を「威儀」と言います

今年の八月のお盆時期、鹿児島に帰省いたしました。庫裡の二階からの眺めです。

した。そんな中、親鸞さんは真の仏教を伝えようと努められました。親鸞さんが葬儀をされたこと

秋季彼岸会法要のご案内

日時　九月二十五日（日）午後二時

講師　赤松　秀敏　先生
（東京都済生会病院医師）

講題　グリーフ・ケアについて

日程
一四：〇〇　おつとめ
『新制　御本典作法』中「正信偈」
『宗祖讃仰作法』中「念仏・和讃」
一四：四五　おはなし
一五：四五　座談
一六：一五　恩徳讃

南無阿弥陀仏ってどんな意味

「南無阿弥陀仏」とは元はインドの言葉で「ナマス・アミターユス・ブッダ」です。「ナマス」とは私の理解では、「屈する」という意味になります。屈するというのは「参ったな」ということ、「参ったな」に続く思いは「まかせます」ということです。「南無父ちゃん」「南無母ちゃん」と考えてみてください。「父ちゃん、あなたに参った」「だって父ちゃんが、私のことをそんなに思ってくれていたなんて、参ったなあ」「母ちゃん、お前に参ったなあ」。これが「南無」です。そして「参ったなあ」というのは「参った限りは、私の人生、あなたにまかせて生きていくわ。参ったなあ、まかせます」ということです。「でもこんな気持ちになったのも、私が気づくより先に、あなたが私のこと思っていてくれたからだね。本当にありがとう」というのがお念仏なのです。「参ったなあ、おまかせします。まかせる心もいただきもの」という思いで、僕らは称えているのだ、と言いました。

『長生きのゆくえ』より

「盂蘭盆会」では「参る」ことで、先人が仏さまとして、いつも傍におられることをあらためて味わう仏縁でありましょう。

お彼岸は「参る」ことで、必ずお浄土に生まれ、仏さまになっていく我が身であることを味わう仏縁だと思います。

「参拝する」「お参りする」ということは、「まかせなさい」「おまかせします」と仏さまに遇う場なのでしょう。お彼岸もどうぞお参りください。



【悲嘆（グリーフ）】

現代日本は、稀にみる高齢化社会を迎えつつあります。戦後、多くの日本人が都市に移り住み、そして大家族から核家族へと変化が進みました。かつては自宅で亡くなる方が多かったのですが、近年は病院で亡くなる方が大半となり、近親者の死を身近に経験する機会、死と向き合う機会が減少しました。また、伝統的な宗教が弱体化し、葬送儀礼も形骸化しつつあります。同時に、地域社会も弱体化し、葬送に対する地域社会からのサポートも減少しています。死生観が空洞化し、悲嘆を抱える方々を支える場、癒やしの場が少なくなっています。

多元価値社会とも言える現代は、一人ひとりが、自らの生きがいを求める時代、人間らしい死に方を求める時代であると言うこともできます。それは、医療や先端科学技術の現場はもとより、福祉や介護の現場、災害や事件・事故教育の現場、葬儀の現場など、さまざまな現場において、グリーフケアが必要とされる時代となっています。

（上智大学「グリーフケア研究所」インターネットより）

現世利益和讃について

九首目 ㄇ

二三六号の続き

南無阿弥陀仏をとなふれば（なもあみだぶつ）
炎魔法王尊敬す（えんまほうおうそんきょう）
五道の冥官（ごどうのみょうかん） みなともに
よるひるつねにまもるなり

恐怖は存在しない

炎魔というのは、怖ろしい地獄を主宰する存在のことです。この世で嘘を言った亡者は、炎魔に舌を抜かれると言われています。峻烈な裁判官でしょうか。この世では人間たちをうまくごまかしたつもりでも、炎魔は騙されません。この世の裁判官はうまく騙すことができても、炎魔の法廷は騙すことはできません。以前、ロッキード事件の裁判で「記憶にございません」と言った証人のせりふが流行ったことがあります。あれはうまく考えついたもので、やったのに「やってません」と言ったら偽証罪になりますが、「記憶にない」と言えば偽証罪にならないのでしょうね。でも、炎魔さんにはちゃんとわかっていて、五道の冥官に舌を抜かれることになることでしょう。この世では、他人を騙してお金儲けをしたり地位を手に入れたりできても、炎魔だけは騙せません。生きている間に行ったことは、炎魔が持っている浄玻璃鏡という鏡にありありと映るのだそうです。

終戦後間もなく、法律を守って飢え死にした裁判官がいたことを憶えています。厳しい食糧事情の中で闇物資を買わなかったから、飢えて死んでしまったのです。しかしこういうことができる人は、あまりいないと思います。自分一人だけだったらともかく、家族を養わなければならなかったら、これはなかなかできないのではないでしょうか。妻子を餓死から守ろうと思ったら、法律を犯して闇物資に手を出すことがあったかもしれません。しかし、この誠実な判事の場合は、自分に配給された分の食料を子どもたちに与えたため、子どもたちは死ななかったのです。私たちは戦後の一時期、多少とも法律を犯して生きてきたように思います。だから地獄で秋霜烈日の炎魔大王に裁かれるのは明らかな話です。

ところが、その怖ろしい閻魔大王でも南無阿弥陀仏を称える人を尊敬するというのです。裁きの王が南無阿弥陀仏の人を丸ごと肯定するのです。不思議なことですね。キリスト教であれば、悪魔はどこまでも神の敵ですから、残滅されなければなりません。悪魔が信仰の人を守るということはあり得ません。むしろその悪魔を撃滅するのが、神の意志と正義だということになります。善と悪との戦いということが、キリスト教という宗教の根本にあるからです。神の正義に基づくキリスト教の信仰には、歴史的世界の最後の日にイエスが再臨して本当の信仰心がある者とそうでない者を裁く、最後の審判というものがあります。だからその審判を受けるまでは、信仰があるからと言っても天国に行けるとは限らないのです。ローマのバチカンに行くと、システィーナ礼拝堂にミケランジェロの最後の審判の絵が架かっています。神を信じなかった人が地獄に堕ちて行く様子が、大画家の手で克明に描かれています。たとえ親子や夫婦であっても、神を信じなかった人は離ればなれです。西谷啓治先生は、キリスト教の思想で仏教徒にとって一番理解しにくいのは、たとえば自分の家族が地獄に堕ちても自分は天国に行くという心境だ、と言われたことがあります。しかし仏教の場合は、自分だけがお浄土に往くということはないのです。お浄土に往った人は、まだお浄土に生まれていない人を救うために、還相回向のはたらきをします。自分だけお浄土に生まれたら終わりではなく、お浄土に往った人は、必ず衆生を救うはたらきに出るのです。

この和讃では、罪人を裁くエンマ大王であっても、南無阿弥陀仏を称える人を尊敬して護ると言われています。これは念仏の不思議きわまるはたらきであります。炎魔と言っても、実は仏さまが形を変えた存在かもしれませんね。キリスト教の悪魔は神の敵であって、神が姿を変えた存在ではありません。宗教改革者のマルティン・ルターは、悪魔を現実に見たと言われています。悪魔は決して観念や想像上の存在ではなく現実の存在だということが、彼の思想にはあります。悪魔は実在するのです。それほど厳しく悪は神と対立するのです。最後には悪魔が神の言うことを聞いて信者を守るなどということはあり得ません。ところがお念仏の世界は裁きの主である炎魔大王ですら阿弥陀仏の人を敬って護るという世界です。

十首目

南無阿弥陀仏（なもあみだぶつ）をとなふれば
他化天（たけてん）の大魔王（だいまおう）
釈迦牟尼仏（しゃかむにぶつ）のみまへにて
まもらんとこそちかひしか

【意訳】

お念仏を称える人をば、
他化在天の大魔王も
釈迦牟尼仏の前で
守護することを誓ったのである。

【出拠】

『大方等大集経』巻第六「月蔵分」のなかに「諸天王護持品」第九にのたまはく、「・・娑婆世界の主、大梵天王・他化自在天・化楽天王・・もろもろの衆生をして三悪道を休息せしめんがゆゑに、・・」と。
（『三帖和讃ノート浄土和讃篇』豊原太成師編著）

他化天の大魔王とは、欲界の最上である第六天にいる魔王のことです。仏法の守護神ではなく、仏法の邪魔をするような神です。他化天というのは欲界の一番上の世界ですから、欲を充たすことを生の目的にする世界です。その欲界の大魔王が、南無阿弥陀仏の人に出会ったらどうするかと言うと、お念仏の人を必ず護りますとお釈迦さまの前で誓ったと言われるのです。これは『大集月蔵経』その他に説かれていることです。南無阿弥陀仏に出遇ったら、大魔王も大魔王でなくなるというのが仏法の不思議です。

このように親鸞聖人は、いろいろな世界の善神、天の神、地の神を挙げてお念仏の利益をお説きくださっていますが、これはなぜだろうかという疑問があることでしょう。昔の人にはそう説明した方がわかり易かったというようなことではありません。昔も今も、私たちは自分たちが住んでいる世界がどういう世界なのか、わからないままに生きているのでありましょう。私たちは、社会という自分たちが知的に作り管理できる世界の中に生きていると思い込んでいます。しかし社会というものは、それよりもはるかに大きな自然の中にあります。人間社会の底に、人間の世界でない世界、いわば底なき世界に通じているとも言えます。そういう自然の世界は、人間が自分たちの意思で選んだ世界ではなく、私たちがいわば、その中へ投げ入れられているような世界です。哲学者ハイデガーは、人間存在は世界の内に投げられた「被投性」というあり方をしていると言っていますが、自然とはまさしくそういう世界だと思われます。つまり自然の世界とは、もともと人間の想定不可能なことが起こる世界なのです。そういう本質的に不可測な世界であることを、いろいろな神々が住む世界だと言われているわけです。これは昔も今も変わらない、われわれがその内にある世界というものの本質ではないかと思います。

どれだけ科学文明が発達しようと、科学的世界のもう一つ底には、われわれの技術が作ったのではない世界があります。自然は科学技術の産物ではありません。人間が科学を生み出す以前から自然はすでにあります。ですから、太平洋の海底プレートは人間の同意などまったくなしに動くのです。いったん動いたら大津波が起こって、原子力発電所を直撃し、大きな人災を引き起こすことにもなります。その意味では、私たちは今日でも魔神の住む世界に生きているのでしょう。天災だけでなく、人間の作った世界である社会の中でも、不気味な事件が起こったりします。常識ではとても考えられないような異常な殺人事件などが起こるのは、私たちの生きているこの世界が、もともと私たちにはよくわからない所だということではないでしょうか。科学を発明したわれわれ人類は、今日と言えどもわけのわからない世界に住んでいるのです。親鸞聖人は、そのことを言っておられるように思います。この世には、人間の手で作れる安心などどこにもありません。不透明で不安定な世界に、一人ひとりが手探りしながら生きているだけのことです。このことを、論理でない詩的言語でおっしゃっているのが、これらの和讃です。

「天地にみてる悪鬼神」という表現には、それが特に鋭く見られます。それではそういう怖ろしい神々の住む世界で、私たちは夜も眠れないほど心配しながら生きていくしかないのかというと、そうではありません。南無阿弥陀仏を称え信じたら、怖ろしい大魔王さえ、その人を護ることを知らされるからです。たとえ津波に

巻き込まれて、この世の命が終わることがあったとしても、南無阿弥陀仏を信じた人は必ず仏さまになるのです。もしこの大きな利益がなかったら、宗教は一体どんな意味があるというのでしょう。真の宗教はこの世を楽しく過ごすために人間が考えついた手段や装置ではありません。この世という所は、何が起こるかわからない不気味な場所です。ところが、阿弥陀さまの言葉を信じる人は、どんなことに出合っても必ず仏になるのです。そう聞かされると、私たちは初めて安心できます。心配することはなかった、私は仏さまに成らせていただく身であった、南無阿弥陀仏の名号がそのことを私に伝えてくださっているのだ。この真理が聞えたら、私たちは、今、ここで安心することができるのです。

【他化天】

天上界の中でも人間界に近い下部の六天は欲望に束縛される世界で欲界に含まれ六欲天として分けられる。（第一天）四天王　持国天・増長天・広目天・多聞天がいる場所（第二天）忉利天　須弥山の頂上で、帝釈天がいる場所（第三天）夜摩天　焔摩天がいる場所で快楽を伴う（第四天）兜率天　須弥山の頂上で、菩薩が修行している場所（第五天）化楽天　娯楽の境で楽変化天ともいう。（第六天）他化自在天　三界における欲界の最高位の天、この世のすべてを操りすべての欲望を叶える神。

※親鸞聖人は『十王経』関連の経論の引用は全くありませんので、地蔵菩薩に関わる信仰は述べておられません。

【地蔵菩薩】（先月の「アルトネ」レポート続）

石川さんは「お坊さんの姿をされていて、右手に錫杖（しゃくじょう）を、左手には宝珠を持っています。お地蔵さんがインドで生まれたときは頭を丸めていませんでしたが、中国に渡り、浄土教と融合して特別の役割を与えられました。それは六道輪廻で苦しむ衆生の救済というテーマでした」と話します。「大地をつかさどる地蔵菩薩の対になるのが天をつかさどる虚空蔵菩薩。浄土教の中では、弥勒菩薩の出世までの無仏時代の衆生を救済する仏として地蔵菩薩が説かれます」。お坊さんという身近な姿から子どもの守護神としても信仰されるようになったそうです。「こういった姿のお地蔵さんは、中国で成立した地蔵十王経で十王の上位に立つ尊格として、地蔵菩薩が説かれています。いわば、閻魔王などの十王を統括する仏ということで中国の経に説かれています」。

【三界名称】

	仏		
	独覚（辟支仏、縁覚）		菩薩
	阿羅漢		縁覚
			声聞
無色界	非想非非想処天（有頂天）		
無色界	無所有処天		
無色界	識無辺処天		
無色界	空無辺処天		
色界	第四禅天	色究竟天	
色界	第四禅天	善見天	
色界	第四禅天	善現天	
色界	第四禅天	無熱天	
色界	第四禅天	無煩天	
色界	第四禅天	広果天	
色界	第四禅天	福生天	
色界	第四禅天	無雲天	
色界	第三禅天	遍浄天	
色界	第三禅天	無量浄天	
色界	第三禅天	少浄天	
色界	第二禅天	極光浄天	
色界	第二禅天	無量光天	
色界	第二禅天	少光天	
色界	第一禅天	大梵天＝梵天	
色界	第一禅天	梵輔天	
色界	第一禅天	梵衆天	
欲界	六欲天	空居天	他化自在天（第六天、摩天）
欲界	六欲天	空居天	化楽天
欲界	六欲天	空居天	兜率天（一生補処の菩薩、弥勒の住居）
欲界	六欲天	空居天	夜摩天
欲界	六欲天	地居天	三十三天（忉利天）帝釈天他３２天
欲界	六欲天	地居天	四天王（持国、増長、広目、多聞）
欲界	地上	須弥山の四方	北倶盧州＝鬱単越
欲界	地上	須弥山の四方	西牛貨州＝瞿陀尼
欲界	地上	須弥山の四方	東勝身州＝弗婆提
欲界	地上	須弥山の四方	南贍部州＝閻浮提
欲界	地上		人間・修羅・畜生（傍生）
欲界	地下		餓鬼
欲界	地下		地獄　等活地獄　黒縄地獄
欲界	地下		衆合地獄　叫喚地獄
欲界	地下		大叫喚地獄　焦熱地獄
欲界	地下		大焦熱地獄　無間地獄

（『三帖和讃ノート　浄土和讃篇』豊原大成氏著）より

親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年　慶讃法要 企画

親鸞聖人を知ろう

【連載　親鸞と聖覚】

親鸞の吉水草庵時代の法兄に聖覚という僧侶がいます。この人物についてはすでに前回に取り上げました。聖覚の念仏についての考え方は親鸞に近いものがありました。親鸞は信仰上、聖覚を大変信頼していました。その後二十年、親鸞は鎌倉で聖覚に再会したのではないか、と私は考えています。

聖覚はどのような人物だったのでしょうか。あらためて、いかなる家に生まれ、吉水草庵の外ではどのような生活をしていたのか、という点から見ていきたいと思います。彼は食うや食わずの聖（ひじり）のような低い身分の者ではなかったのです。

一方の親鸞は中級貴族の出身でした。父の朝廷での職は皇太后宮大進でしたから、これは従六位上位の者が任じられる職で、それだけで見たらもう下級貴族です。それに対して、聖覚は天台宗のもっとも高い僧位である法印大和尚位を授けられた誇り高い人物でした。聖覚の一族、特に伯叔父や伯叔母の夫たちはあるいは政界において、あるいは宗教界において顕職を得ていました。それは親鸞の父や伯父たちの比ではありませんでした。

親鸞が出家の時に付き添ってくれたという伯父の日野範綱は、それでも後白河法皇の近臣として仕えました。当時全盛の平清盛を倒そうとした鹿ヶ谷事件では、清盛方に逮捕され、拷問の上播磨国に流されています。もう一人の伯父の宗業は後鳥羽上皇に気に入られて最後は従三位まで昇り、親鸞の越後流罪の時には越後権介に就任させてもらってその流人生活を助けています。その系図は次のようになります。系図中、「家司（けいし）」とは上級貴族（従三位以上）の家で家来として働く中級貴族のことです。

- 日野範綱 ― 後白河法皇の近臣
- 日野宗業 ― 九条兼実の家司
  後鳥羽上皇の近臣
- 日野有範 ― 親鸞
- 三善為教 ― 恵信尼
  九条兼実の家司

藤原通憲
- 俊憲　従三位参議
- 貞憲　従四位下少納言 ― 貞慶『興福寺奏状』の作者
- 是憲　従五位下少納言、法然の門に入る　法名円照
- 静憲　法印、法勝寺執行、『後三年合戦絵詞』の作者
- 澄憲　法印権大僧都 ― **聖覚**　法印権少僧都
- 憲雄
- 成範　正二位中納言
- 勝憲　醍醐寺座主、東大寺別当、権僧正、密教の祈祷で知られた
- 明遍　権大僧都、高野山蓮華三昧院を創立。法然の門に入る
- 脩範　正三位参議。和歌に優れる
- 光憲
- 寛敏　広隆寺別当、法眼
- 覚憲　大安寺別当、興福寺別当、権僧正、唯識・因明（論理学）に優れる
- 行憲　少納言阿闍梨と号す
- 憲俊
- 憲俊
- 憲慶　阿闍梨二位と号す
- 女子　藤原隆季（正二位権大納言）妻
- 女子　藤原長方（従二位権中納言）妻
- 女子　藤原親信（正二位中納言）妻
- 女子　藤原家房（従二位権中納言）妻
- 女子　源　為国（崇徳院判官代。信濃村上氏の祖）妻

まさに華麗な一族ということができます。聖覚は二十人前後いる息子たちの一人澄憲の息子でした。

ちなみに法然や親鸞が流罪にされた承元

の法難の遠因となった興福寺奏状（専修念仏者たちの許すべからざる行状をあげて、後鳥羽上皇に断罪を迫ったもの）は、笠置の貞慶が執筆しました。その貞慶は聖覚の従兄弟だったのです。さらに出家した伯叔父もいろいろな寺院で指導者として活躍しています。

慈円は僧侶として無位無官の法然を嫌っていた気配です。しかしその門弟の聖覚とは仲良く、信頼し合っています。「近い親族だったら信仰上、敵対関係にはないだろう」とか、法然が慈円と不仲なら、法然の門弟が慈円の傘下に入ることはないだろう」とか、「専修念仏者同士だったら、みんな、仲良しだろう」と決めてかかるのは危険です。

承久三年（一二二一）、聖覚は『唯信抄』を著しました。親鸞四十九歳の時です。『唯信抄』は、法然の『選択本願念仏集』と親鸞の『教行信証』の橋渡しをする著書とされています。七十五歳の時に『教行信証』をほぼ完成させるまで、親鸞はやさしい教義書を執筆する気持ちがありませんでした。門弟たちから要求された時には『唯信抄』を筆写して送っていました。七十九歳の時にはついにその注釈書『唯信抄文意』を執筆するに至ります。

親鸞は稲田に住んでいました。稲田の東方数キロのところには、常陸国で二位、三位の広さを争う小鶴荘という大荘園がありました。現在の茨城町を中心とした地域です。そしてここは関白九条兼実の九条家領でした。九条家は親鸞の出身日野家や、妻恵信尼の出身三善家の主家にあたります。小鶴荘の役所を通せば京都との連絡は容易に取れたのです。親鸞はいつかの時点で『唯信抄』の存在を知ったものと推定されます。

安貞元年（嘉禄三、一二二七）七月、鎌倉では北条政子の三回忌法要が挙行されました。それは二度にわたって行われました。まず第一の法要について、『吾妻鏡』同年七月十一日条に次のように記されています。

二位家第三年御仏事、丈六阿弥陀堂供養也。日次の事、度々沙汰有ると雖も、遂に以て今日に及ぶ。導師荘厳房津師行勇。請僧廿口。舞楽は之を略せらる。御布施三十。物二十五。竹御所、御聴聞の為、渡御し給ふ。相州・武州・匠作井已下の結縁の貴賤、勝計すべからずと云々。

「今日、北条政子（二位家）様の三回忌法要がありました。丈六の阿弥陀仏を納める御堂の落慶式を背景にして行いました。日程については、何度も変わりましたが、やっとこの日に落ち着きました。導師は荘厳房津師行勇でした。法要に参加した僧は廿人でした。いつも行われる舞楽は中止になりました。謝礼金は三十人分寄贈の品物は二十五個でした。鞠子（まりこ。竹の御所。源頼家の娘で政子の孫。第四将軍藤原頼経の妻）様が法話を聞く為に出席されました。北条時房（相州）・同泰時（武州）以下、多数の人たちが参列しました。

この三回忌法要は五月二十九日の予定でしたが、その前日、泰時の次男で跡継ぎであった時実が家来のために殺されたので、のびのびとなっていたのです。舞楽中止もそれに関係があるでしょう。

【朝日日本歴史人物辞典】

没年：嘉禎一年三月五日（一二三五年三月二五日）
生年：仁安二年（一一六七年）

平安・鎌倉時代の天台宗の僧。藤原通憲の孫父は澄憲法印。父と共に唱導の安居院流を開く安居院の法印とも呼ばれる。比叡山で出家し比叡山東塔北谷竹林房の静厳について学び、恵心檀那の両流を相伝した。後に竹林院の里房である安居院に住み、唱導法談をもって一世を風靡した。法然に師事して浄土教に帰依して他力念仏を勧めた『唯信抄』を書く。『一期物語』によれば、法然が瘧の病のときに、九条兼実が聖覚に命じて善導の影前において唱導を行わせたところ病が治ったという。嘉禄の法難（一二二七年、法然門下の専修念仏者に加えられた迫害）では念仏停止を進言した。雅成親王からの下問に対して答申したり、後鳥羽上皇からの宗義の勅問を受けて答申し、大いに活動した。

※親鸞聖人が人々に勧めた『唯信抄』の著者が何故、念仏停止を進言したのでしょうか。単なる自己保身でしょうか？当時の念仏者の言行が、法然教義から逸脱してきたからでしょうか。

稱讃寺　行事予定

二〇二二年　九月の行事予定



六日（火）のんのん法話会　一四時

一六日（金）のんのん法話会　一四時

二五日（日）秋季彼岸会法要　一四時

講師　赤松秀敏先生
（東京都済生会病院医師）

講題　グリーフ・ケアについて

二六日（火）のんのん法話会　休座

往生（おうじょう）浄土（じょうど）と　日々（ひび）

新（あら）たに　生（う）まれ　往（ゆ）く

二〇二二年「心のともしび」九月カレンダーより

「ウクライナ緊急支援募金」募集について

本願寺派では、ロシアの軍事侵攻により避難生活を余儀なくされているウクライナの人々を支援することを目的に、緊急に「たすけあい運動募金」において標記募金の募集を開始いたしました。
つきましては、募金にご協力いただきますよう、下記の通りお願い申しあげます。　　合掌

記

1．募金の名称　　浄土真宗本願寺派　たすけあい運動募金
「ウクライナ緊急支援募金」

2．受付口座番号

〈郵便振替〉　０１０００－４－６９９５７
加入者名　たすけあい募金

〈銀行振込〉　銀行　ゆうちょ銀行
店名　一〇九（イチゼロキュウ）店
番号　当座　００６９９５７
名義　たすけあい募金

※通信欄に「ウクライナ緊急支援」とご記入ください。

編集後記（愚案）

ドイツの前首相のメルケルさんが、コロナ禍中「ヨーロッパが今日このようにあるのは、啓蒙と科学的知見への信仰のおかげであり、人はもっとそれを大切にすべき」と演説しました。この言葉に私自身は賛同しておりました。ロシアのウクライナ侵攻がはじまり、経済制裁をすれば、この戦争は大戦にならず、間もなく停戦終結すると思われましたが、既に半年が経ち、長期化し、世界中、日本も例外なく経済的ダメージを与え、エネルギー問題にもおよび、原発の利用が高まっています。また、安倍元首相の殺害のお陰？で、明るみになった政治（特に自民党）と旧統一教会の関係も問題になっています。（神道政治連盟も恐いなあ）この間、二〇二一年版の「科学技術指標」が公表され、日本の提出論文数が減少しており、日本の将来性を危惧していました。科学が発達することは、人類の明るい未来があると思っていましたが、原発神話が復活しています。経済も「経世済民」と言われるように人々を平等に救うのが本来のはずが、ただのお金儲け・権力誇示になっています。政治家をはじめ人々は、親鸞聖人がおっしゃる偽教を宗教として信仰してしまう。昔から私たちは「思うようになりたい」と「現世利益」を求めました。神た対するものが人間叡知（科学・経済）と思っていましたが、今はその科学・経済を神として現世利益を願っているのでしょうか。